

二〇一九年度

二月二日午前入試(第三回)

国語 (45分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答题紙の解答らんには、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、3-1 から 3-11 まであります。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

父親を事故で亡くし、母親とともに母親の故郷である姫島ひめじまに引っこしてきた多岐川星乃たきがわほしのは、クラスのだれとも関わらず、心を閉ざして毎日を過ごしていた。ある日、星乃はアサギマダラをつかまえる。アサギマダラはまだら模様あざが鮮やかなチョウであり、数千キロもの長距離ちようきりを移動する。星乃が捕獲ほかくしたアサギマダラはマーキング※されていた。翌朝、星乃のクラスでアサギマダラ※のことが話題にあがった。

「多岐川が見つけたアサギマダラは、長野から飛んできたということがわかった。マーキングされたのは九月五日。昨日が十月十三日やから、一か月以上かけて、距離きょりにすると六百キロ以上を旅してきたということになる。」

翌朝のホームルームで三船先生みつふねが切りだすと、六年一組の教室はとたんにもりあがった。

「一か月以上!？」

「六百キロ!？」

「長野!？」

「つてどのへんだっけ?」

「おいおい。社会の勉強をしちよらんのはだれや?」

先生があきれた声を出す。

星乃のとなりで志帆しほが手を上げた。

「マーキングされたアサギマダラをつかまえたのって、多岐川さんが初めてやないですか?」

① クラスメートの視線が星乃に集中する。いきなりたくさんの視線にさらされ、星乃は思わずうつむいた。

「先生はあるぞ、再捕獲さいほく。」

「ほんとですか。」

「アサギマダラがやってくる時期は、休みの日も捕獲に出ちよるからな。五月には鹿児島かごしま、今の時期には石川や福島から飛んできたアサギマダラをつかまえたこともあるぞ。」

「すごい!」

先生と志帆の会話が星乃からそれたので、星乃はほっとした。

「わたしたちが昨日マーキングしたアサギマダラたちも、南に行くんですよね。」

志帆が話を続ける。

② 「そうやな。鹿児島や沖繩おきなわ、もっと遠くの台湾たいわんで再捕獲されることもあるらしい。」

星乃は、昨日手に取ったアサギマダラの感触を思い出した。星乃の手のひらよりも小さく、重さなど少しも感じなかった。そんなアサギマダラが日本列島だけでなく、外国まで旅をするだなんて。そのとほうもなく長く、過酷かこくであろう道のりを思うと、どうしてわざわざ旅をするんだろうと首をかしげ

てしまう。

それと同時に、昨日と同じ疑問がまたわいてきた。いったい、どんな人がつかまえたのだろう。どうして星マークを書いたのだろう。星マークとの運命的な出会いを心のなかに大切にしまっておくのもいいけれど、^③ などを解きたいという好奇心こうきしんもある。

「あの。」

星乃は思いきって手を上げた。クラスメートの視線がまた集まるのがわかる。

④ 星乃^{ほしの}は先生だけを見て、声をしぼりだした。

「はねに、なんて書かれていたんですか。」

「多岐川^{たきがわ}のつかまえたアサギマダラか？」

「はい。」

すると、先生が教壇^{きょうだん}に置いていたカメラを手に取った。

昨日アサギマダラを写したカメラだ。

「カタカナでナガノ。これは、マーキングされた場所が長野県ということや。それから、数字で9／5。これは日付やな。あと、カタカナでリュウセイ。これは捕獲^{ほかく}した人物の名前だろう。」

「リュウセイ……。」

名前がわかっただけで、ドキドキしてきた。

「それから星マーク、イコール、100と、横一列に書かれている。100は個体番号かもしれん。」

「個体番号ってなんですか。」

「マーキングするときにつける番号のことや。昨日のアサギマダラは、リュウセイが百番目にマーキングしたアサギマダラということになる。」

「星マークに意味はあるんですか。」

「マーキングでこんな記号を書くというのは、きいたことがないな。」

「イコールは？」

「それもきいたことがない。」

先生が、うで組みをしてしばらく考えこむ。それから「なんと^⑤いうか、素人^{しらうと}っぽいんだよなあ」とつぶやいた。

「どうしてですか。」

「いくつか疑問点があるんや。まずナガノについてだが、マーキングに慣れている人物ならより細かい地名を書くだろう。長野といっても、捕獲されるスポットはいくつもある。われわれが^{おおいた}大分と書かずにヒメと書くのがいい例や。それから二点目。名前は三文字のイニシャルで書くことがいいとされちよる。アルファベツトなら外国に飛んでいった場合でも理解してもらえらるだろうし、三文字ならそうスペースもとらない。だがこの名前は、カタカナで五文字も使って書かれちよる。三点目、それが星マークとイコールや。われわれはねに書かせてもらっている立場なんやから、むやみに落書きをしてはいかん。意味不明な星マークを書くなんてもつてのほかや。こういう点からして、リュウセイはたまたま捕獲してマーキングの意味を知らずに書いた素人と、先生は思ったんや。」

すると、志帆^{しほ}がまた手を上げた。

「百頭もつかまえちよるのに、素人ですか。」

⑥ 「たしかに100が個体番号だとしたら、素人とは言えないか。」

「今の推理、さっそく穴が見つかりましたね。」

志帆がにやりと笑う。

「波木^{なみき}はきびしいなあ。」

二人のやりとりをききながら、星乃は頭の中を整理した。

（リュウセイは素人？ それとも百頭もつかまえてるベテラン？ でも、マーキングの仕方はめっちゃくちゃだった。どういうこと？）

頭がごちゃごちゃになってきた。顔も知らないリュウセイのことがこんなにも気になってしまうのは、星マークのせいだろうか。

(それに……)

あのアサギマダラは、わざわざフジバカマ畑からぬけだして星乃のほうに飛んできたように思えた。先生は星マークを落書きだと言ったけれど、星乃にはそうは思えない。たしかに^⑦もってのほかの行為にはちがいないだろう。けれど、リュウセイの何か特別で大切な思いがこめられている気がするのだ。

(考えすぎだよ。人間が勝手にはねに文字を書いているっていうのに……)

けれど、どこかのだけかとつながりがあるかもしれないと思うだけで、ちよつと心がほつとする。

「おっと、もうホームルームの時間が終わるな。小学校でのアサギマダラの捕獲授業は、今回で最後だ。次は五月だからな。中学で捕獲の授業があるかわからんが、趣味でマーキングするなら先生はいつでもつきあうぞ。」

先生がはっはっは、と笑いながら、教室を出ていく。星乃はあわてて立ちあがった。クラスメートの視線を背中に感じながら、廊下に出る。

「先生！」

先生が振りむいて、目をぱちくりさせる。

「なんやなんや。自分から手を上げたり質問したり、今日はやけに元気があるやないか。」

にかつと笑いかけられ、星乃ははずかしくなり口ごもった。いや、ここで A しているわけにはいかない。気持ちをふるいたたせ、しっかりと先生を見つめる。

^⑧「リュウセイを探す方法ってありますか。」

すると、先生がまた目をぱちくりさせた。星乃はさらにはずかしくなる。けれど、先生は質問されたことがうれしいのか、満足そうにうなずいた。

「じつはもう調べたんや。リュウセイがメールアドレスに登録していれば、情報を送信しちよる可能性があると思うてな。でも、なかったんや。100という数字が個体番号だとしたら、リュウセイはこれまでに少なくとも百頭、マーキングしていることになるんだが、一通も見当たらなかった。」

「一通も……。」

「星マークのアサギマダラの情報をメールしておいたから、リュウセイがメールアドレスに登録していれば気づくかもわからん。」

「登録していなかったら？」

「手がかりはないな。」

^⑨「そうですか……。」

一気に力がぬける。

「いや、待てよ。」

先生がぼんと手をたたいた。

「多岐川のおばあさんは、民宿『風』の風子さんやったな。」

「そうですけど……。」

「『風』に行ってみろ。あしたは土曜日、せつかくの休みや。」

「アサギマダラと『風』に、何か関係があるんですか。」

「まあ、いいやないか。行ってみろ。」

わけがわからないまま、「はあ」と返事をする。

教室にもどろうとすると、先生に呼びとめられた。

「なんにでも積極的にいくんだぞ。今、廊下に出てきたみたいにな。」
また、にかつと笑いかけられ、星乃もほんのり笑顔になった。

『風』のロビーはせまい。ところどころ生地がやぶれたソファと小さなテーブル、ひと昔前のマンガ雑誌ばかりならんだ本棚、パソコンの置かれた机。それらがあるだけで B だ。

星乃はロビーを見まわした。昨日三船先生に『風』に行ってみろと言われたけれど、ここにいったい何があるというのだろう。

ロビーの窓から見える空は、すがすがしく晴れわたっている。この時期は、島の特産品である車えびがおいしい時期で、観光客が多く『風』もいそがしいのだそうだ。

「ほしちゃん、お昼ごはん、おまたせ。」

小柄でほっそりとしたおばあちゃんは、すつきりとした顔立ちがお母さんとよく似ている。けれど、身のこなしやしやべり方は、お母さんと比べると、ずいぶんしゃきしゃきしている。しゃきしゃきしているから『風』も切りもりできるのだろうか、切りもりしているうちにしゃきしゃきとしてきたのだろうか。

星乃の前に、おばあちゃんがお盆をさします。どんぶり茶碗のごはんの上に、いろいろなお刺身と大きなえびが三尾も入っていた。豪華な海鮮丼だ。

「おいしそう！これが車えび？」

「そうよ。この時期の車えびは、甘くておいしいの。さ、食べなさい。」

「いただきます！……あ、お母さんは？」

「チェックイン前でね。まだ客室のそうじが終わらないよ。」

おばあちゃんがとなりに座った。視線を感じて、星乃ははしにのびした手を止める。やわらかそうな木綿のエプロンをつけたおばあちゃんが、たんぽぽの綿毛のようなふんわりした笑顔をこちらに向けていた。

「なあに、おばあちゃん。」

「ううん。なんにもないわ。」

そう言われても気になる。これまで年に一度会うか会わないかくらいだったおばあちゃんに見つめられると、 C して食べるに食べられない。

「おばあちゃんは食べないの？」

「さっきお菓子をつまんだからいいんですよ。」

「お母さんは？」

「そうじが終わったら、お母さんにも用意しようね。」

お母さんが元気だったころの口ぐせが、「島の新鮮な魚が恋しいわ」だったことを思い出した。

「島はどう？」

ふいにきかれ、星乃は口ごもり、「い、いいところだと思うよ」と、あわてて言った。

「いいんよ、気をつかわなくて。」

「気をつけてなんかないよ。」

「ほしちゃん。」

おばあちゃんがまっすぐに星乃を見た。

「不安なことや心配なことがあったら、おばあちゃんに言うんよ。」

お母さん、まだ元気がないんだ。

わたしもまだ、ここでの暮らしに慣れないでいるの。

もどりたいんだよ。お母さんもわたしも、お父さんのいたころの毎日に。

どれも言うてはいけないことのような気がして、星乃は「大丈夫だよ」と言うて、どんぶりをかきこんだ。

星乃が食べおわるのを見届けると、おばあちゃんは仕事にもどっていった。三時がチェックインの時間で、それまでに夕食の下ごしらえをしておくらしい。

しばらくソファーに座っていたけれど、お母さんの姿は見えないし、三船先生の言葉の意味もわからなかった。もう帰ろうかと雑誌を本棚にしまうと、すみに立てかけられているアルバムが目についた。何げなく手に取り、開いてみた。

「あ……。」

アサギマダラ。アサギマダラ。アサギマダラ。そこには、アサギマダラの写真ばかりが何十枚もおさめられていたのだ。

すると、おばあちゃんが、フロントから顔を出した。フロントの壁にかかっている時計を見ると三時十分前だ。そろそろお客さんがやってくる時間なのだろう。

「おばあちゃん。このアルバム、どうしたの。」

「全部わたしが撮ったんよ。お客さんに自由に見てもらおうと思って、置いちよるの。」

「へえ。」

星乃はアルバムをばらばらとめくった。フジバカマ畑の上を飛ぶ大群の写真は、今の時期に写したものだろ。背景が海岸のものもある。これは初夏に写したものにちがいない。五月中旬から六月上旬にかけて、海岸に咲くスナビキソウという花を求めてアサギマダラが飛来するのだと、三船先生が言っていた。

「あ、これ。」

星乃は一枚の写真のページで手を止めた。アップで写されたアサギマダラのはねに、文字が書かれている。

「わたしがマーキングしたんよ。」

「おばあちゃんが!？」

おどろいた。おばあちゃんが捕虫網を振りまわしている姿なんて、ちつとも想像できない。

「情報をメールに書きこんだりもしちよるんよ。そこにあるパソコンはそのためのもの。もちろん、お客さんの希望があれば、お貸しすることもあるけどね。」

⑪ 三船先生が言っていたのは、おばあちゃんにきいてみるということだったのだ。

(それしか考えられない……!)

「おばあちゃん、三船先生って知ってる? わたしの担任の先生なんだけど。」

「もちろん知っちゃうわよ。ほしちゃんのクラスの担任だったのね。何年前前に島の小学校に赴任してきたんよ。そうそう、三船先生、赴任の下見に来たときに、何日かここに泊まってね。島についていろいろきかれたから、アサギマダラの話をしたんだったわ。それで興味を持ったみたいで、すぐにメールリングリスト仲間になったんよ。そのあと、子どもたちに教えたいからって言うて、何度かやってきてたっけね。」

星乃が転校したてのころ、職員室で先生にアサギマダラについて教えてもらったことを思い出した。もう何十年も研究している博士のような口ぶりで語っていたけれど、おばあちゃんが先生の先生だったのだ。

「いい先生でしょ。大学を卒業して、初めに赴任したのがこの島なんだって。来たばかりのころは色が白く

てひよろつとしてて、ちょっとたよりなさそうで、いかにも新米先生って感じでね。それが、アサギマダラをつかまえにしょっちゅう外に出ちよるからかしら。すぐに島の人って雰囲気ふんいきになったわねえ。」

色白でひよろつとしていたなんて、今の先生からは想像ができない。年齢ねんれいだって、星乃ほしのの想像より五歳ごさいくらい年下だったとは。あのワイルドな先生が、島に来たころは全然ちがっていたなんて、なんだかおかしくなる。

(それより……。)

それならそうと、^⑫ どうして先生はおばあちゃんがアサギマダラにくわしいと、初めから教えてくれなかったのだろうか。

ふてくされそうになって、星乃は、「なんにでも積極的せきごくにいくんだぞ」と言った先生の笑顔えがおを思い出した。(そっか。きつとわたしに探しあててほしかったんだ……。)

どうしても引っこみ思案しあんになってしまふ星乃に、勇気を出させたかったのだ、きつと。島に自分を変えてもらおうなんて他人まかせじゃいかんぞ、という、先生の声がきこえた気がした。

(東田澄江『あした飛ぶ』より)

※(注) マーキング——つかまえたしるしをチヨウのはねに書くこと。つかまえた日付や場所からアサギマダラの移

動状況どうじょうきょうを知ることができる。

問一 —— 線① 「先生はあるぞ、再捕獲さいほく。」とありますが、「再捕獲」とは何をどうしたことを指しますか。

解答らんの「こと」につながるように文中から二十字以内でぬき出し、その初めと終わりの五字を答えなさい。

問二 —— 線② 「もつと遠くたいわんの台湾で再捕獲されることもあるらしい。」とありますが、ここでの「らしい」と同じ使い方をしているものを次のア、エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 学生がくせいらしい服装ふくそうを心がける。

イ 小さくてかわいらしい女の子。

ウ 明日も東京は晴れるらしい。

エ あきらめない姿勢しせいがいかにも彼らしい。

問三 —— 線③ 「なぞを解きたいという好奇心こうきしんもある。」とありますが、どのようなことが「なぞ」なので

すか。次のア、エの中からすべて選び、その記号を答えなさい。

ア アサギマダラはどうしてわざわざ長く過酷かこくな道のりを旅するのかということ。

イ アサギマダラを星乃の前に捕獲したのはどのような人物なのかということ。

ウ アサギマダラに星マークが書かれていた理由は何かということ。

エ アサギマダラのはねには星マークのほかには何が書かれていたのかということ。

問四 — 線④「はねに、なんて書かれていたんですか。」とありますが、はねには書かれていないものを次のア〜クの中から二つ選び、その記号を答えなさい。

ア 長野 イ ☆ ウ ➡ エ 100
オ ナガノ カ リユウセイ キ $\frac{9}{5}$ ク =

問五 — 線⑤「素人^{しろうと}っぽいんだよなあ」とありますが、先生が「素人っぽい」と思ったのはなぜですか。その理由として述べられているものを三つ、それぞれ解答らんの「から」につながるように文中の言葉を使って二十字以上二十五字以内で答えなさい。

問六 — 線⑥「今の推理、さっそく穴が見つかりましたね。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「穴が見つかりましたね。」とありますが、ここでの「穴」の意味として最も適当なものを次のア〜エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 不完全なところ イ 隠^{かく}されているところ
ウ 危険なところ エ 予測できないところ

2 「推理」に「穴が見つかった」と言ったのはなぜですか。次のア〜エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア もし100が個体番号でないとしたら、リュウセイがたまたま捕獲^{ほかく}してマーキングの意味を知らずに書いたと考えられるため、素人だと推理するのが自然だから。

イ もし100が個体番号でないとしたら、リュウセイが意味不明の番号を書いたと考えられるため、素人だと推理するのが自然だから。

ウ もし100が個体番号だとしたら、リュウセイが百番目にマーキングしたアサギマダラだと考えられるため、素人だと推理するのは不自然だから。

エ もし100が個体番号だとしたら、リュウセイが百頭ものアサギマダラを保有していると考えられるため、素人だと推理するのは不自然だから。

問七 — 線⑦「^グもつてのほか^グの行為^{こうゐ}にはちがいないだろう。」とありますが、なぜ「^グもつてのほか^グの行為」なのです。その理由が書かれている一文を文中からぬき出し、初めの五字を答えなさい。

問八 文中の A B C にあてはまる言葉を次のア〜クの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

ア ぎすぎす イ そわそわ ウ すかすか エ うじうじ
オ めそめそ カ ぎゅうぎゅう キ いらいら ク わくわく

問九 —— 線⑧「リュウセイを探す方法ってありますか。」とありますが、星乃ほしのがこれほど「リュウセイ」を気にかけているのはなぜだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア アサギマダラはわざわざフジバカマ畑からぬけだして自分のほうに飛んできたように感じています。不思議な現象の理由をリュウセイと一緒に考えてみたいと思っているから。
- イ アサギマダラに書かれた星マークにはリュウセイの特別で大切な思いがこめられているような気がしており、リュウセイに対してどこか運命的なつながりを感じているから。
- ウ アサギマダラがつないでくれたリュウセイを運命の相手にちがいないと信じており、自分がクラスメートとうまくいっていないことを相談したいと考えているから。
- エ アサギマダラに書かれた星マークが落書きであるならば、勝手なふるまいをした理由をリュウセイに問いつめなければ気がすまないと感じているから。

問十 —— 線⑨「一気に力がぬける。」とありますが、この時の星乃はどのような様子だと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア あきれている
- イ おどろいている
- ウ がっかりしている
- エ あきらめている

問十一 —— 線⑩「星乃は『大丈夫だよ』と言うと、どんぶりをかきこんだ。」とありますが、この時の星乃の気持ちとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 島での暮らしに不安を抱えながらも、慣れようと頑張がんばっているのに、おばあちゃんが必要以上に心配するのをうっとうしく思う気持ち。
- イ 島に対する不満があっても、それを口にするのははばかられるので、言葉にしなくともおばあちゃんに気づいてほしいという気持ち。
- ウ 自分やお母さんが島での暮らしに慣れず、心の傷も癒いえていないことを自覚しつつも、おばあちゃんに対して言葉に出すことがためらわれる気持ち。
- エ 島での暮らしに早く慣れるために、お母さんと二人でがんばろうと決意しており、おばあちゃんには余計な口出しをしてほしくないという気持ち。

問十三——線⑪「三船先生みつふねが言っていたのは、おばあちゃんにきいてみるということだったのだ。」とありますが、「三船先生」が「おばあちゃんにきいてみる」と言ったのはなぜだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア おばあちゃんがマーケティングしたアサギマダラとリュウセイが捕獲ほかくしたアサギマダラに共通点が見つかるとは考えられないから。

イ アサギマダラにくわしいおばあちゃんであれば、リュウセイにつながる情報を得られるかもしれないから。

ウ 人生経験の豊富なおばあちゃんにきけば、リュウセイに思いを伝えるためのヒントを教えてくださいませんか。

エ 新米だった三船先生をおばあちゃんに変えてくれたように、星乃ほしのもおばあちゃんに変えてもらえるかもしれないから。

問十三——線⑫「どうして先生はおばあちゃんがアサギマダラにくわしいと、初めから教えてくれなかったのだろうか。」とありますが、三船先生が星乃に「おばあちゃんがアサギマダラにくわしいと、初めから教え」なかったのはなぜだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 他人まかせでいるかぎり、この島に住むことができないと伝えなかったから。

イ 自分から島に慣れようと努力すれば、自分を変えられると伝えたかったから。

ウ 引っこみ思案にならず、自分から進んで物事に関わる勇氣を持ってほしかったから。

エ 積極的におばあちゃんと関わることで、人との関わり方を学んでほしかったから。

問十四 文中の登場人物に関する説明としてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア おばあちゃんは、民宿『風かぜ』を営んでいる。優しく面倒見めんどうみのいい女性であり、島に赴任ふにんしたばかりの三船先生がアサギマダラに興味を持つきっかけをつくった。

イ 三船先生は、星乃の担任である。島に赴任してからアサギマダラについて何十年も研究しており、アサギマダラがやってくる時期は休みの日にも捕獲に出ているほどである。

ウ 星乃は、島での暮らしに慣れないでいる。クラスでも引っこみ思案なタイプであるが、アサギマダラについてはクラスメートの視線を気にしながらも勇氣を出して先生に質問している。

エ 志帆しほは、星乃のクラスメートである。星乃がつかまえたアサギマダラについて積極的に先生に質問をし、説明に矛盾むじゅんしたところがあれば即座すくざに指摘してきするような鋭すばさも持ち合わせている。

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① エンエイ大会で優勝する。
- ② 日本のコト、奈良を旅する。
- ③ 選挙エンゼツ会に出かける。
- ④ 小学校時代のオンシに出会う。
- ⑤ りっぱなカマエの家。

問二 次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 港が大漁でにぎわう。
- ② こづかいを工面して本を買う。
- ③ 戸外に出てあそぶ。
- ④ たくましい骨格の人。
- ⑤ 土地を売買する仕事。

問三 次の①～③の□に「不・無・非・未」のいずれかの漢字を入れて、熟語を完成させなさい。

- ① □ 熟
- ② □ 限
- ③ □ 可

問四 次の①・②の□に色を表す漢字一字を入れなさい。

- ① あの人は□の他人だ。
- ② 雪が降って、あたり一面は□世界になった。

問五 次の①～③の□に体の一部分を表す漢字一字を入れて、慣用句を完成させなさい。

- ① □が躍る(期待や興奮で落ち着かない)
- ② 二の□を踏む(ためらっていること)
- ③ □から火が出る(恥じて赤面する)

問六 次の①・②の慣用句の意味として最も適当なものをそれぞれ後のア～エの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

① 目から鱗うろこが落ちる

- ア 今まで運の悪いことが多かったのが、急に運がよくなること。
- イ 今までよく分からなかったことが、急によく分かるようになること。
- ウ 今までひまであつたのが、急にいそがしくなること。
- エ 今まで関心がなかったのが、急に関心をもつようになること。

② 口を割る

- ア 間に入って仲を取りもつこと。
- イ かくしていたことを言うこと。
- ウ 最初に言い出すこと。
- エ 不満を言い始めること。